

# 留学生と日本人学生の合同授業の取り組み

## ——実践報告と今後の課題——

大谷みどり・中園 博美

### 1. はじめに

グローバル化の進展に伴い、大学の国際化が喫緊の課題であることは論をまたない。本学においても、留学生数を増やすことを具体的な目標のひとつとして様々な背景を持つ留学生を受け入れてきており、その数 2021 年 5 月現在、214 名である（島根大学国際センター、2021）。多様な文化的背景を持つ留学生たちと、日本人学生が共に学ぶことに大きな教育的意義があることは明らかであるが、その目的や授業形態はさまざまである。留学生と日本人学生の「共修」の実践報告や研究は多く見られるが（永井他（2014）、館岡（2015）など）、共通して述べられていることは、留学生が大学に増えているにも関わらず、日本人学生との交流の機会は極めて少ないということである。筆者らも同様のことを実感しており、両者の交流の機会創出が必要ということから、各自が担当する 2 つの授業、「日本語上級 A」と「異文化の交流と理解」の一部を乗り合わせ、留学生と日本人学生の「合同授業」となる実践を約 6 年に渡って行ってきた。ここでは、取り組みの全体の概要、ならびに 2021 年の実践を具体的に見ていき、今後、より発展的な授業の実現に向けた課題と提案を述べる。

### 2. 合同授業のきっかけと内容

本合同授業は、学部を超えて留学生に関わる 2 名の教員が留学生に関する情報共有をすすめる中で、それぞれが授業で求めているニーズに合致したこと、また授業の開講曜日・時限が同じであったことから始まった。2016 年度～2021 年度後期に、外国語教育センターの「日本語上級 A」と教育学部の「異文化の交流と理解」の各授業全 15 回のうち、3～4 回を「合同授業」として実施してきた。

#### 2.1 「日本語上級 A」について

外国語教育センターの授業「日本語上級 A」（中園担当）は、留学生向け日本語科目である。受講生は、学部留学生と交流協定大学からの交換留学生、日本語・日本文化研修留学生で、日本語レベルは日本語能力試験であれば N 1 合格程度からそれ以上である。いずれの年度においても、最も多い留学生の出身国・地域は中国であるが、交換留学生のおかげで多様性があり、その他は年によって違いがあるが、マレーシア、台湾、韓国、ベトナム、インドネシア、タイ、ポーランドなどである。受講生数は、約 15～20 数名で、学部留学生については毎年数名を除き、1、2 回生であった。

外国語としての日本語を「書く」技能を学ぶクラスであり、書く目的に応じて様々な形式や語彙・表現を使い、ある程度自由度のあるテーマのもとで文章を書く演習を行う。本来、「書く」ことにおいて最も重要で本質的なことは、伝えたいことが読み手に的確に伝わるこ

とであり、常に読み手を意識して書くことが望ましい。しかしながら授業において留学生が「書く」のは演習のためであり、同じ非母語話者のクラスメートとお互いの文章を読み合う活動があるものの、不特定多数の日本語母語話者に読んでもらうことは、何らかのしかけを作らない限り困難である。「合同授業」はまさにそのしかけとなりうる機会であったため、日本人学生との活動の中に、「日本語で書く」タスクを多く組み込むこととした。

## 2.2 「異文化の交流と理解」について

教育学部の授業「異文化の交流と理解」（大谷担当）は、主に英語教育専攻・副専攻の学部1回生を対象としている。授業では改めて「文化」とは何かを考えた上で、具体例を活用しながら、特に言語と文化の関係とその事象について、様々な視点から捉え直し、学生自らが身の回りを含めての異文化交流例について考察する授業である。実際の異文化交流も重視しているため、本授業担当時より、学期に1回は外国人ゲストを招聘し、学生たちに生の交流が出来る機会を作っていた。しかしながら1対多数ではなく、より個人レベルでの交流が出来ることを望んでいたことから、留学生との合同授業は願ってもない機会であった。受講生について、本合同授業を開始した当時は、言語教育専攻（国語教育と英語教育）1回生必修授業であり40名近くの学生が受講していたが、2017年度のカリキュラム改正に伴い、現在は英語教育専攻1回生必修・副専攻選択必修となり、受講生数は20～30名である。

## 2.3 合同授業の内容の変遷

合同授業の取り組みは、毎年の実践を繰り返しながら、授業の中でよりよい「交流」が生まれるよう工夫を重ねてきた。実践は、日本人学生による日本文化に関するグループ発表に、留学生が発表の聞き手として参加することから始まった。「異文化の交流と理解」の授業では合同授業開始以前より、この発表を課していたが、留学生が発表の聞き手として参加することにより、日本人学生は、より実践的な内容・工夫を考えることが出来るようになった。また留学生からのフィードバックも、現在に至るまで非常に有意義なものとなっている。

その後、留学生が書いた教育、学校をテーマとした作文をもとにグループで行うディスカッションを加えた。他に、留学生が授業で作成したアンケートに日本人学生に回答してもらい、その調査結果をまとめ、その発表を日本人学生に聞いてもらう、という活動を加えた時期もあった。2020年度からは、グループ発表の前にお互いをよく知るための時間を持つことが交流活動に有効であると考え、「自己紹介」セッションを設定するようにした。以下では、コロナ禍2年目でもあった2021年度の実践を見ていく。

## 2.4 2021年度「合同授業」の実践

2021年度は、3回の合同授業を行った。各回の内容は、1) 自己紹介を中心とする会話中心の交流、2) 日本人学生グループによる、留学生への日本文化紹介プレゼンテーション、

3)「母国の教育、学校」をテーマにした留学生の作文を読んでのディスカッション、とした。各回の合同授業に先立ち、それぞれのクラスで行った内容の詳細について、以下の表に示す(表1)。今年度の参加者は、留学生24名、日本人学生25名である。また、コロナ禍にあったため、留学生のうち10名は母国にてオンラインで受講しており、合同授業も対面とオンラインのいわゆるハイブリッド形式で行った。

表1 2021年度合同授業の流れと内容

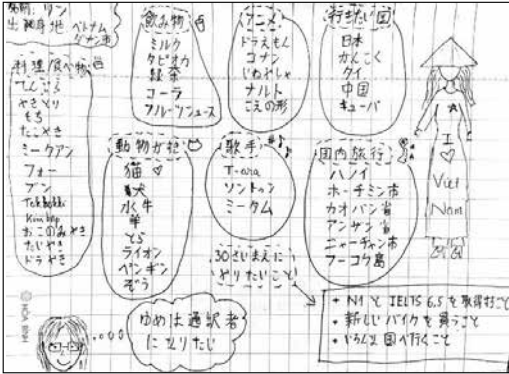
	留学生クラス	日本人学生クラス
1回目 事前準備 [自己紹介 セッション]	「私の大好きなもののマップ」を書く。相手に見せながら話すことを前提としたもので、大好きなものごとを単語レベルでどんどん書きだし、イラストや色なども使って自由に表現する。書き上げた「マップ」は、授業前にインターネット上で留学生クラス全員のものを見られるようにする。(写真3)	留学生が作成した「私の大好きなもののマップ」を参照しながら、留学生に自己紹介しやすいことを意識して、A4 1枚に自由に自己紹介マップ(シート)を作成する。あわせて、留学生に尋ねたい質問を、少なくとも3つ考えてくることを課した。(写真4)
1回目 合同授業 [自己紹介 セッション]	基本的に留学生1人対日本人学生1人のペアで15分を1回とし、相手を変え4回、自己紹介を兼ねた交流を行う。その際、あらかじめ用意した「大好きなもののマップ」その他を利用する。(写真3、4) 母国からオンラインで受講している留学生とペアになる日本人学生はPCを教室に持ち込み、Web会議アプリ「Zoom」を利用して活動を行う。ペアは事前に教員が計画しておく。(写真1、2)	
2回目 事前準備 [日本文化に 関する発表]	日本人によるグループ発表のテーマ決定の参考としてもらうことを目的として、自分が「日本」に関連することで知りたいこと、関心があることについて端的に書き、インターネット上の共有サイトで伝える。	4人1組で、留学生を対象にした日本文化に関するグループ発表の内容を考える。留学生が伝えてきた知りたいこと・関心があることと、1回目の自己紹介活動での情報も参考にする。
2回目 合同授業 [日本文化に 関する発表]	日本人1グループ15分の発表を行う(発表10分、質疑応答5分)。 発表グループ以外の日本人学生、留学生は、グループ発表を聞き、コメントや質問を書く。コメントは、留学生・日本人学生からのものを、それぞれの発表グループに返し、日本人学生の振り返りの材料とする。また留学生からの質問に対して、日本人の発表グループからの返信をインターネット上で共有する。日本人学生は、自分のグループ発表について、準備段階を含めての振り返りを別途提出。	
3回目 事前準備 [留学生の作 文を軸とした ディスカッション]	「教育」「学校」に関するテーマを決め、自国のことや自分自身の経験について説明する作文を書く。同国出身学生が同じテーマにならないよう調整する。教員からのフィードバックを受けて推敲し、手書きで原稿用紙に清書する。授業前に、インターネット上で全員の清書した作文が見られるようにする。	できる限り国籍が異なる留学生2名、日本人学生2名の4名を基本とした混合グループを作る。グループ・ディスカッションに向け、日本人学生は同じグループの留学生の作文を読み、事前に留学生の国のことを調べると共に、質問を少なくとも3つ考えておく。
3回目 合同授業 [留学生の作 文を軸とした ディスカッション]	留学生の作文を読み、内容に関する質疑応答や、関連する経験の共有や質問などを通してディスカッションを行う。本時間のグループメンバーは固定なので、活動の合間に、各グループから活動を通してわかった内容や感想をクラス全体に向けて発表してもらい、全体で共有する。また、日本人学生は合同授業1回目と、オンライン/対面の形式が交替するよう調整した。	



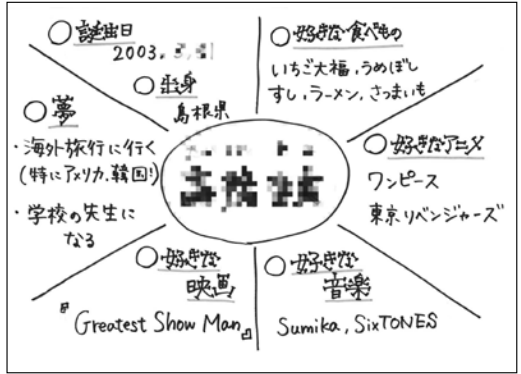
【写真1】 合同授業の様子（対面）



【写真2】 合同授業の様子（オンライン）



【写真3】 私の大好きなもののマップ例（留学生）



【写真4】 私の大好きなもののマップ例（日本人学生）

### 3. 振り返りから見えること

前頁の表1で示したように、合同授業の1回目と3回目は日本人学生と留学生の日本語によるディスカッションが中心であった。留学生と日本人学生が1対1のペア活動、または2対2のグループ活動を終えてからは「振り返り」を書くことを課題とし、活動の前後での変化や学びをはじめ、自由に気づきや考えを述べるように求めた。以下では、このディスカッション活動についての留学生と日本人学生の振り返りを、内容ごとにまとめて概観する。

#### 3.1 活動前の不安

留学生は初対面の日本人学生と1対1で、学習言語の日本語で話すという活動を前にして、「不安」についての言及が多かった。不安の理由は主に、自分の日本語能力や会話技術の不足と、相手の日本人学生の人柄や積極性についての心配によるものだった。他には、日本人と1対1での交流経験がないこと、自分の性格が内向的であり知らない人との交流自体が苦手であること、15分間話を続けられるかどうか自信がないこと、などの理由があげられた。

日本人学生からも、様々な不安についての記述が見られた。まず背景として、殆どの学生が留学生と同じく、外国人との1対1での交流経験がないことが明らかになった(例外は、海外への修学旅行、大学での他の授業、再履修の3名のみ)。従って事前の不安理由として、

どのような日本語を使ったらよいか分からない、何を話したらよいか分からない、話が途切れないかが心配等の記述が見られた。

### 3.2 日本人学生／留学生に対するイメージ・考えの変化

留学生は活動前後で、日本人学生に抱いていたイメージや考えに変化があったという記述が多かった。前述した活動前の不安の理由にもなっていたが、日本人学生が、もしかすると「冷たい」、「積極的でない」、「不愛想」、かもしれない、というイメージを抱いていた。しかし活動後には、ほぼすべての留学生が、そのような負のイメージが好ましい評価に転じたことを述べていた。具体的には、日本人学生の親しみやすく、思いやりやユーモアが感じられる態度や笑顔、自分にもわかりやすい日本語の使用や話し方、自分の日本語をきちんと聞いてくれる傾聴の姿勢、それぞれの個性、などに接したことを、驚きをもって述べていた。

日本人学生から留学生へのイメージの記述としては、まずは「言葉の壁がある」という心配が多く、また「話しかけにくい」の他、留学生との交流活動自体へのイメージとして、堅苦しい等の記述があった。しかしながら活動後のイメージの変化として、まずは留学生の日本語能力の高さを筆頭に、日本語学習への熱意、日本文化・社会への興味関心の高さ等の記述が多く見られた。また、留学生が話しやすい、気さく、親切等の記述も見られた。

### 3.3 日本語、外国語の使用・学習について

留学生のコメントでは、自分が使う日本語に関して、「今まで、正しい文法を使っているかを心配しすぎていた」、「交流のとき、日本語能力が最も重要ではないと感じた」、「日本語をより上達するには実際に日本人と話す練習する必要があることがわかった」、「来日してはじめて日本語でたくさん話せることが嬉しかった」というものがあった。

日本人学生から最も多くの記述がみられたのは、前述のとおり「留学生の日本語力の高さ」であった。参加者 24 名中、16 名が触れており、具体的な記述としては、「日本語が上手で非母国語だということを忘れそうになるぐらいでした」「もっと言語の壁は大きいと思っていたが、留学生さんたちの日本語がとても上手で驚いた」「想像の 3 倍ほど留学生の日本語が流暢で、日本人と普通に会話している気分だった」等が挙げられる。日本人学生の中には、留学生の日本語能力の高さに驚き、尊敬の念も表すと共に、自らを振り返り、今後の外国語学習への強い動機付けに繋げている記述も少なくなかった。「自分も英語学習を深め、留学生のようにすらすらと外国語をしゃべりたい」「彼らの日本語学習への意欲や態度を見ることによって、自分自身の英語学習のモチベーションがすごく上がったような気がした。その点では、同じ外国語学習者として尊敬すると共に感謝したい」等の記述があり、外国語学習だけではなく異文化交流に向けても「これからも積極的に留学生と関わっていきたい」等、積極的な姿勢が見られた。

### 3.4 コミュニケーションについて

留学生は、コミュニケーションに関することとして「日本人学生は、日本語が上手な人より楽しんでおしゃべりできる人を期待していた」、「日本人の友達を作りたいなら自分から積極的に話しかける必要がある」、「今回の交流がうまくいったのは、自分も相手も交流したいという考えがあったから」、「他の人と違う興味や考え方は交流を生き生きとした面白いものにしてくれる」、などの気づきをあげていた。また、活動中の自分を省察しての展望や変化としては、「自分は話すことよりも他の人の話を聞いたり質問するほうが多かったので、次回はもっと自分のことを話したい」、「交流は思ったより順調にできたから、これまで日本人の友達を作ることに自信がなくて怖いと感じていたが、その考えが変わった」、「この活動でもっと日本語を話すことに自信を持った」、などがあった。

日本人学生の方は、母語での交流になるため、コミュニケーション活動をリードする責任を感じていた記述も散見された。話を円滑に進める、話題を提供する等に加え、非言語的要素として、笑顔や表情を意識したことが述べられていた。この点については留学生の振り返りにも笑顔の記述があったことが興味深い。コミュニケーションについては、心配していたが円滑に進んだ、という意見が多かった一方で、話が途切れ、沈黙の時間があつたことへの指摘も見られた。

### 3.5 振り返りからのまとめ

留学生のうち、学部留学生は1、2年生が中心で、しかも入学時からコロナ禍にあつた。交換留学生は1名を除き来日できておらず、オンライン留学中だった。そのような状況に置かれている留学生たちのほとんどは、同年代の日本人学生との交流経験をそれほど豊富には持っていなかったため、多くは不安と緊張を持って合同授業に挑んでいた。しかし振り返りからは、「この活動でもっと日本語を話すことに自信を持った」、「日本人は真面目な話し方をすると思っていたが、実際には楽しく話した」、「たくさんの好きなものが同じなので、会話がうまくできた」等のコメントからもわかるよう、オンライン、対面とも、交流にはおおよそ満足していたと言える。

日本人学生からは「非常に貴重な経験をした」「楽しかった」「これから積極的に交流に参加していきたい」という声が非常に多く聞かれた。具体的には「今回の異文化交流は非常に有意義なものになったと感じた」「文化の交流というのは、とても楽しいことだということ再認識することが出来ました。もっとたくさんの外国の方と交流してみたいです」等の振り返りがあつた。

日本人学生にとって、この合同授業からの学びのポイントは下記のようにまとめることが出来る。(1) 留学生(外国人)との「生」の交流を体験することが出来た。マスコミやインターネット上の情報ではなく、直接、留学生の意見を聞くことが出来た。(2) 外国の文化を学ぶと共に、日本文化・社会を見直し、自文化を学ぶ貴重な機会となった。(3) 留学生の話聞き、ディスカッションを通し、視野を広げると共に、留学生とのさらなる交流・自分自身の海外渡航・留学等を考える機会となった。(4) 外国語学習について、留学生の

日本語レベルの高さを経験することにより、自己の外国語学習を振り返り、今後の学習への高い動機付けとなった。他にも、個々の学生にとっては様々な学びがあったことが振り返りから伺える。

一連の合同授業は、ささやかな「交流」の機会を創出する試みからはじまったが、今回、学生の振り返りを分析することで、留学生と日本人学生の合同授業、その中での交流について、多くの示唆を得ることが出来た。学生の振り返りをさらに詳細に、異なった視点・方法で分析することにより、新たな知見を得、両者が共に学ぶ機会を、一層意義あるものにできればと望んでいる。

#### 4. 今後の課題と提案

大学の国際化が叫ばれて久しいが、他大学の取り組み・先行研究からも共通して指摘されている「留学生が大学に増えているにも関わらず、日本人学生との交流の機会は極めて少ない」という現実を改善していくためにも、留学生と日本人学生の交流、さらには協働を含む活動の取り組み・仕掛けが必要である。その点において、合同授業は、授業の一環として確実に交流の「場」を確保することができ、また内容も、授業と関連性を持たせることが可能である。

本実践は、教員個人の考えのもと、二つの別授業の乗り合いの形をとって行ってきたが、日本人学生と留学生が共に学べる正規授業を増やすことにより、国籍を問わず、学生の学びが多様化し、より充実するものと期待できる。本学で、留学生と日本人学生の共修を基本としている授業の例としては、「日本語」を共通語とする外国語教育センターの教養育成科目「異文化理解入門」があり、他にも、グローバル戦略に伴い「英語」で学びあう授業も増えてきている。ただ、それらの授業の数はまだ決して多いとは言えないうえに、大学全体として組織的に開講されているものではない点で、各授業の有機的連携も弱いといえる。

このような合同授業を計画する際は、内容面の検討と共に、実施時期、対象学年等も検討が必要になるだろう。例えば教育学部の場合、教育実習を終えた時期であれば、多少なりとも教育や社会に関する知識が蓄積されているため、ディスカッションの内容を深めることが可能になると考えられる。また、授業運営に必要なファシリテーターとしての役割や発問の仕方、ディスカッションの進め方等の技術も少し身に付けているため、話し合いの進め方に対する不安も、多少解消されると考えられる。さらに現在日本の教育現場で増えている外国人児童生徒への対応にも、留学生との合同授業の経験を活かすことが出来ると考えられる。

本稿執筆中も世界はいまだコロナ禍にあるが、今回の報告 2021 年度合同授業でもその影響で留学生の半数は入国できず、オンラインで母国からの参加となった。教室では、日本人学生の半数がパソコンを持参しオンライン交流に取り組む形としたが、その形式に割り当てられた学生たちからは「次回は対面にして欲しい」、「時間の途中で、オンラインと対面を交替して欲しかった」という要望が多く聞かれた。両方の形式での交流を経験するこ

とも大いに意義があるので、1回目の自己紹介セッションと、3回目のディスカッションでは、オンライン組と対面組のメンバーを総入れ替えした。オンラインで交流をした日本人学生からは、機器の接続トラブルや音声の不具合等が多少あったものの、「楽しく交流が出来た」、「Zoom だったけど、心は繋がっていると感じた」というようなコメントが見られた。オンラインの留学生からは、日本人学生の話すスピードが速く、思っていたよりずっと難しかったと述べながらも「全身全霊で打ち込んだからこそ、その時間を楽しめた」というものや、「まだ日本に行けないので、この機会があって嬉しい」というものがあった。否応なく使うことになったオンラインツールではあるが、その存在のおかげで、日本と留学生の母国が簡単につながり、合同授業の新しい形も作られることになった。この新しい形を使った、効果的な「合同授業」の探求や実践も、今後の大きな課題といえる。

## 5. さいごに

本学の「島根大学ビジョン 2021」には、「学内のグローバル化を促し、国際色豊かなキャンパスを構築する」ことが目標に掲げられ、「外国人留学生と日本人学生の直接的な交流機会の拡充」が計画のひとつとされている。一般的に、大学内を国際化するための言語は国際共通語の「英語」であることが想定されており、先述のビジョンにおいても同様であるが、実際のところ、「日本語」を用いた留学生と日本人学生交流も十分に成立することは、本稿の報告からも明らかである。グローバル人材を求める時代の強い要請にこたえるためにも、大学教育の場において多様な背景を持つ学生同士が出会い、「日本語」で互いに理解しあい共に学ぶ場も、制度的に整える必要がある。本来、学生を留学生と日本人という単純な2項対立でとらえるべきではないが、当面のところは「留学生と日本人学生」が同等の立場で受講できる共修クラスを検討し開講していくことが、学内の国際化につながるものと考えている。

### 【参考文献】

- 小木曾左枝子、大西吉之（2018）「留学生と日本人学生の合同授業におけるディスカッションの試み－学生アンケート結果からの考察」『富山大学国際機構 紀要』創刊号、34-44
- 小木曾左枝子（2021）「合同授業における異文化間コミュニケーション力の開発：日本人学生と留学生とのディスカッションからの一考察」『富山大学教養教育院紀要』第2号、64-74
- 佐藤勢紀子、末松和子、曾根原理、桐原健真、上原聡、福島悦子、虫明美喜、押谷祐（2011）「共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設：留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大学高等教育開発水センター紀要』6巻、143-156
- 島根大学 国際センター（2021）「島根大学の外国人留学生数」<https://kokusai.shimane-u.ac.jp/about/ryugakuseisu.html>（2022年1月6日閲覧）
- 末繁美和、ケーレブ・プリチャード、ジョン・ルシンスキー（2016）「留学生および日本人



学生のインタラクティブな授業の試み」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』第1号、83-92

舘岡洋子（2015）「留学生と日本人学生がともに学ぶ「日本語クラス」：グローバル化する大学の学習環境のデザインとして」『早稲田日本語教育学』（19）、61-71

永井涼子、南浦涼介（2014）「大学授業において留学生と日本人学生は共に何を学べるかー留学生教育と社会科教員養成をつなぐ試み」『大学教育』（11）、49-66